

学習のための学力調査 - 10の原則  
研究に基づいた学級内実践を案内する諸原則  
学力調査改革グループ、2002年

\*\*\*\*\*

## 学力調査改革グループ『学習のための学力調査』2002年

### 学級内実践を導く学習のための学力調査という研究に基づいた諸原則

学習のための学力調査は、学習者とその教員がどこを学習しているか、どこを必要とするのか、そこに行くにはどの方法が最もよいのかということを決めるために使う根拠を探し、学力調査結果を解釈する過程である。

学習のための学力調査は授業と学習の効果的な計画立ての一部であるべきだ。

教員の計画立て(teacher's planning)は、学習者にとっても教員にとっても、学習目標に向けて進歩するよう情報を獲得し、情報を使用する機会を提供すべきである。それは、初めてのまた出現しつつあるアイデアとか技能にも対応できるような柔軟なものでもあるべきだ。計画立てには、学習者が自己の追求している目標やこの活動の調査に適用される基準について理解を確認するという戦略も含むべきである。どのように学習者がフィードバックを受け取るか、どのように自己の学習の学力調査に参加するか、どのように今後の進歩を作り出すために支援されるかということも、計画に入れられるべきである。

**学習のための学力調査は効果的な計画立ての一部である。**

学習のための学力調査はどのように生徒が学習すべきかに焦点を当てるべきだ。

学習の過程は、学力調査が計画されたり調査結果が解釈されるときに、学習者と教員との両方に注意が払われなくてはならない。学習者は、「何を」学ぶかということと同様に「どう」学ぶかについても知るべきである。

**学習のための学力調査は生徒がどのように学ぶのかに焦点を当てる。**

学習のための学力調査は学級内実践の中心と見なされるべきだ。

教員と学習者が教室で行うことの多くは学力調査であるということもできる。このことはつまり、課題や質問は学習者に自己の知識を見せるように促すということだ。学習者が述べ行うことは、観察され解釈される。そして、どのように学習者が改善されるのかという判断が下される。これらの学力調査過程は、日常の学級内実践の本質的な部分であり、そこには教員と学習者双方の省察、対話、解決策決定が含まれる。

**学習のための学力調査は学級内実践の中心である。**

学習のための学力調査は教員の中心的な専門技能と見なされるべきだ。

教員は、学力調査を計画し、学習を観察し、検証結果(evidence)を分析・解釈し、学習者にフィードバックを返して学習者の自己評価を支援するという専門的な知識と技能を必

要とする。教員は、そのような技能を発展させるように、スタート時点でまたその後も継続的に専門性を発達させるよう支援されるべきである。

**学習のための学力調査は教員の中心的な専門技能である。**

学習のための学力調査は、いかなる学力調査も心理的影響を持つので、心に敏感で建設的なものであるべきだ。

教員は、コメント・付け・評点が学習者の自信と意欲与える影響を自覚すべきであり、教員が与えるフィードバックをできる限り建設的にすべきである。人物よりは活動に焦点を当てたコメントが、学習にも動機づけにもより建設的である。

**学習のための学力調査は心に敏感で建設的である。**

学習のための学力調査は学習者の動機づけという重要性を考慮に入れるべきだ。

学習を促すような学力調査は失敗よりは進歩や達成を強調することで動機を育てる。自分よりもうまくいっている他人と比較することは学習者を動機づけしそもない。むしろ、自分が「うまくいかない」と感じている分野の学習から逃避するよう追いやることもありうる。学習者の自律(autonomy)を守り、選択と建設的フィードバックを与え、自己決定(self-direction)の好機を作り出すような学力調査方法によって、動機は保護され高められるのである。

**学習のための学力調査は動機を育てる。**

学習のための学力調査は学習目標への責任と、自分たちが測定されている基準の共通理解を促すべきである。

効果的な学習が行われるために、学習者は、自分が達成しようとしているもの、つまり達成したいと望んでいるものが何かを理解する必要がある。学習者が目標を決定すること、また調査を進展させる基準(criteria)をはっきりさせることにある程度参加する場合には、理解と責任が生じるものである。学力調査基準を分かち合う(communicate)ことは、理解できる用語を使用して学習者と議論すること、その基準が実践の中でどのように遭遇するかという例を提供し、学習者を仲間の評価と自己評価へと参加させることを含む。

**学習のための学力調査は目標と基準の理解を促す。**

学習者は改善方法について建設的な案内を受け取るべきだ。

学習者は、次の段階の学習を計画するために情報と案内を必要とする。教員は、学習者の諸力を正確に位置づけてそれらをどう発達させるかをアドバイスし、弱点とそれらへの取り組みの仕方をはっきりさせ建設的に対処し、学習者が活動を改善する機会を提供すべきである。

**学習のための学力調査は学習者がどう改善するかがわかるように援助する。**

学習のための学力調査は、学習者が省察的になり自己管理できるよう、学習者の自己調査力を高める。

自立した(independent)学習者は、新しい技能、新しい知識、新しい理解を探求し獲得す

る能力を持っている。自立した学習者は、自己省察を行い、次の段階の学習を明確にすることができる。教員は、学習者に自己調査の技能を発達させることで、自己の学習に取り組む意欲と能力を学習者に持たせるべきである。

**学習のための学力調査は自己調査力を発達させる。**

学習のための学力調査は全ての学習者の到達度の全領域を認識すべきである。

学習のための学力調査は、教育活動の全領域において全ての学習者の学習機会を高めるように利用されるべきである。学習のための学力調査は、全ての学習者がベストを尽くし、その努力が認められることを可能にすべきである。

**学習のための学力調査は全ての教育到達度を認識する。**

\*\*\*\*\*

「学習のための学力調査」は、学力調査のもっとも重要な目的の一つである。これがただ一つの目的というのではなく、また、評点をつけたり記録するために実施されるような「学習に関する学力調査」と区別されるべきものである。ブラックとウィリアムが行った学級内学力調査の研究によると、「学習のための学力調査」は、学習を改善し水準(standards)を向上させるもっとも強力な方法の一つである。現在の研究は、この見解を支持するような検証結果を加えつつある。実験による検証結果は、学習心理学の理論と学習動機の研究とによって補強されている。「学習に関する学力調査」は念入りに作られた手続きとなっているが、「学習のための学力調査」は、そこから恩恵を得るために、実践にうつす理論的アイデアを必要としている。これを実行するには、学習のための学力調査の本質的特徴を映し出すような案内となる諸原則を追求することは重要である。

ここに提示されている『学習のための学力調査の諸原則』は、広く多様な諸個人と諸団体からのコメントから恩恵を受けてきた。その援助には謝意を表したい。このリーフレット(ポスター)は、学力調査の実践を、教育目標を達成するのに要請される学習経験に必要な質の保護へと変化させる次のステップとなる。

学力調査改革グループ(ARG)は、「学習のための学力調査」に関する研究による検証結果を教育界の注目を引くために中心的な役割を果たしてきた。たとえば、ブラックとウィリアムの共著『ブラックボックスの内側』、その続編『学習のための学力調査 - ブラックボックスを越えて』である。学力調査における実践を改善しようという努力を続けるなかで、この『学習のための学力調査の諸原則』が発展してきた。

この諸原則を作成した学力調査改革グループのメンバーは、以下の通りである。パトリア・ブロードフット教授(ブリストル大学)、リチャード・ドーエティ教授(ウェールズ大学)、ジョン・ガードナー教授(クイーンズ大学)、ウィン・ハーレン教授(ブリストル大学)、メアリー・ジェームズ博士(ケンブリッジ大学)、ゴードン・スタバート博士(ロンドン大学教育学部)。

このリーフレット(ポスター)は、ナッフィールド財団の援助を受けて作成された。

学力調査改革グループの活動についてもっと知りたい方、およびこのリーフレット(ポスター)のコピーをダウンロードしたい方は、以下を参照のこと。

<http://www.assessment-reform-group.org>

(福田誠治・訳)